P-119

病院内で早産児写真展を閲覧した家族の声～世界早産児デーの取り組みの実践報告～

笠井由美子[1]、西田みゆき[2]
[1]川崎市立看護大学
[2]順天堂大学　保健看護学部

【目的】
新生児集中治療室（Neonatal Intensive Care Unit :以下NICU)入院児の家族は、生命維持への不安、先の見えない不安など多岐にわたる。そのような家族が見通しを持てるように、世界早産児デーに合わせて病院内で写真展を開催した。写真展は、NICUに入院経験のある家族の協力を得て、入院中と現在の子どもの写真や家族の気持ち・入院児の家族へメッセージ・出生週数や出生体重も含めた情報とした。今回、この取り組みを後方視的に振り返り、評価することを目的とした。
【方法】
1）研究対象者：写真展（1か月間開催）を閲覧したNICU入院児の家族。2）データ収集と分析方法：掲示したQRコードから、無記名オンライン質問紙調査を実施し、自由記載の感想から質的帰納的に分析。3）倫理的配慮：無記名オンライン質問紙調査は、対象者に研究目的、方法、結果の発表、無記名で匿名性が保持されること、他の目的に使用しないことについて文書で説明。同意した本人がQRコードを読み取り回答することで、研究参加への自由意思を尊重した。また、写真展は写真撮影禁止とし、写真協力者の情報漏洩防止に努めた。
【結果】
8名から回答を得て、21コードから3カテゴリーが構成された。「まだ『将来が楽しみ』と言える状況ではないが、そう言える日が来ると信じて頑張ろうと改めて思うことが出来た」、「我が子と同じくらいの週数や体重で産まれた子の写真がとても励みになった」といった〔小さく産まれた子どもが成長している事実を知りパワーを得る〕が抽出された。また、「長い入院と毎日の搾乳に挫けそうになる時もある」といった〔小さく産まれた子どもの親の押し潰されそうな思いの吐露〕、「・・3歳未満の写真は元気だけど、その後はどうなるのだろう・・」といった〔写真展構成への期待〕に分類された。
【考察】
NICUに入院中の児の家族が、様々な育ちを知ることは、肯定的な見通しを得て、頑張る支えにつながったと考えられた。家族は、我が子と同等の状況で生まれた子どもの成長過程やある程度成長した幼児以降の情報を求めていることが明らかになり、今後は多様な発達時期を踏まえて開催する必要性がある。また、このような情報をイベントの時だけでなく、常に身近に得られる機会をNICU入院中の児をもつ家族には必要であることが示唆された。

P-120

赤ちゃんと家族の望むNICUに関するアンケート調査

柴田　優花[1]、和田　友香[1]、諫山　哲哉[1]、竹安　陽子[2]、長谷川風夏[3]、清水　結香[3]、相川　理紗[3]、菅島加奈子[3]、林　英美子[4]、伊藤　裕司[1]
[1]国立成育医療研究センター　周産期・母性診療センター　新生児科
[2]国立成育医療研究センター　小児内科系専門診療部　心理療法士
[3]国立成育医療研究センター　看護部
[4]一般社団法人　未熟児家族支援・がんばりっこ

【はじめに】
出生直後からの親子分離は、愛着形成不全や退院後の育児困難感を生じやすい。特にNICU入院中は医療者による治療やケアが中心になりがちで、家族は疎外感を抱き、愛着形成に問題を生じやすい。家族と医療者の良好なパートナーシップに基づく家族中心のケア（Family-centered Care：FCC）は欧米を中心にさまざまな方法で実践され、赤ちゃん、家族、医療者それぞれにとっての利点が報告されているが、FCCに含まれる内容は幅広く、また家族からのFCCに対するニーズについての報告は乏しい。当院の現状を家族の視点で把握するために調査を行った。
【対象と方法】
対象は2018年4月1日から2021年3月31日に国立成育医療研究センターNICUに2週間以上入院した赤ちゃんの家族とした。アンケート案内のはがきを郵送し、Google Formsアプリケーションを用いて無記名で回答を収集した。アンケートの回答をもって同意取得とした。内容は面会時間や方法、入院中の医療者の対応、音環境や設備に関する満足度について、4段階の評定尺度法及び自由記載方式で、患者家族会の意見も取り入れて作成した。統計ソフトEZRとテキストマイニングツールKH Coderを用いて解析した。
【結果】
対象は256家族でそのうち115人から回答を得た。入院期間の中央値は2ヶ月（0-16ヶ月）で、新型コロナウイルス感染拡大に伴う面会制限を経験した家族は43.5%
だった。面会制限前後で、面会時間や面会方法に関する不満・やや不満の割合が7.0%
から40.0%と有意に上昇した（$p<0.05$）。音環境に関しては、8割がアラーム音を含めた医療機器の音が気になる、3割が医療スタッフの話し声が気になる、と回答した。また、4割の家族がNICU内で居心地の悪さを経験した、と回答した。自由記載では、さく乳・授乳や医療者とのコミュニケーションに関連するコメントが多く、医療者の言葉に傷ついた経験を語ったコメントも少なくなかった。
【考察】
出生直後からのスムーズな愛着形成には、医療者からの適切な支援と安心して過ごせる環境が必要である。医療者のコミュニケーションスキルアップとリラックスできる空間作りが喫緊の課題であり、医療者・家族・患者家族会で連携し解決に取り組みたい。

Presented by Medical*Online